

論文要旨

ニコラス・ヒリヤード『リムニング技術論』の研究

下村道子

ニコラス・ヒリヤードは16世紀後半のイギリスの宮廷細密肖像画家である。細密肖像画は、フランスとイギリスで1520年代に中世の彩飾写本の技術を引き継ぐ小型肖像画として誕生し、16～17世紀にはリムニングと称された。ニコラス・ヒリヤードの描いた細密肖像画は、エナメルや宝石で装飾された金細工に納められ、忠誠、友情、愛の証として身に付けられ、エリザベス女王の宮廷で一世を風靡した。彼はイギリスにおける細密肖像画の全盛期を築いた。ヒリヤードは金細工師としても活躍し、細密肖像画を納める金細工、国璽、メダルなども制作した。1600年頃、イタリアのマニエリスム画家パオロ・ロマッツォの『芸術論』を英訳したリチャード・ヘイドックの勧めに応じて、『リムニング技術論』を著した。彼は細密肖像画の制作技術を解説するほか、約3分の1にわたって宝石についての記述、すなわち宝石論を展開している。この著作は出版されず、仲間うちで書写され、読まれたと考えられる。今日唯一の写本がエディンバラ大学図書館に所蔵されている。

ヒリヤードの研究は1912年にフィリップ・ノーマンによって『リムニング技術論』の校訂と解説が発表されて以来、本格的に始まった。これまでの研究では、同書はイギリス人画家による最初の本格的な絵画論であると評価されるものの、古今の著作の引用が多く、独創性が乏しいと批判されることもある。宝石論はほとんど十分に検討されることはなかった。

本論文は、宝石論に着目しヒリヤードの『リムニング技術論』を分析することによって、その内容と特徴を明らかにし、新たな評価を与え、なぜ彼の細密肖像画がエリザベス朝で人気を博したのかその要因を探るものである。

第1章では彩飾写本から細密肖像画が成立する過程と独立を促した要素を考察し、その後ヒリヤードが引き継ぐまでの先人たちの貢献を検討した。ヒリヤードの作風を理解するために、彼の生涯を辿り、細密肖像画、油彩画、メダル、そして金細工作品を概観した。

第2章ではこれまでの『リムニング技術論』の評価について検討したのち、ヒリヤードの細密肖像画についての理論、具体的な技術指南、絵具と色彩論、個人的なエピソードに分けて考察した。ヒリヤードは、細密肖像画をほかの絵画より上位に位置づけて、最も高貴な絵画であり、それゆえジェントルマンに相応しい技であると独自の理論を提示し、自身の経験に基づく技術指南を展開している。

第3章では彼の宝石論を、古代以来の鉱物や宝石についての鉱物誌や百科全書などの著作と比較し、その特徴を明らかにした。たとえば1世紀のプリニウスの『博物誌』、13世紀のアルベルトゥス・マグヌスの『鉱物論』、鉱物学の父ゲオルグ・アグリコラの『鉱物の性質について』、およびそ

の他の鉱物誌は、宝石や鉱物が持つと信じられていた神秘的な力や効能や薬効を列挙するが、ヒリヤードはこうした伝統的な迷信に一切言及せず、宝石の価値は色と輝きの美しさにあるという主張を貫き、各宝石に関する自己の体験と観察による詳細な解説をしている。その内容には現代の宝石に対する価値観の誕生を見ることができ、ヒリヤードの宝石論の近代性が明らかになった。また次世代の金細工師の著作のなかにヒリヤードの少なからぬ影響を見ることができた。

第4章では、ヒリヤードの宝石論が、細密肖像画の描法にどのように表れているかを検討した。彼にとって宝石は、描かれたものであっても、美しい色と輝きを持たなければならなかったように見える。彼は、細密肖像画はほかの絵画と違い、特別で最も高貴な絵画であり、金細工にきわめて近似した絵画であると考えた。それゆえ技法においても素材においても共通すると考え、金細工の技術と知識を駆使し、独自の描法を拓いた。その技法は『リムニング技術論』のなかでは、簡略に記述されているが、次世代の細密肖像画家たちによって、詳細が明らかにされた。

ヒリヤードはイギリスにおいて細密肖像画の人気を最高潮に高めた。彼は細密肖像画の技法と金細工の技術と知識を融合した独自の技法によって、正確な線描と鮮やかな色彩と輝きのある卓越した作品を描いた。ヒリヤードの作品の人気の要因の一つは、金細工にも等しい色彩と輝きを持つ、彼に独自の技法にあったと考えられる。彼の『リムニング技術論』は細密肖像画という特別な肖像画の技術指南書として、また、宝石論は現代の宝石の価値観に通ずる彼の主張を貫き、経験主義的な知識として迷信を排した近代的な宝石論として、高く評価することができるものである。